冥闇の追想

平井純譌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
冥闇の追想

【Ｎコード】
Ｎ０２７６Ｓ

【作者名】
平井純譌

【あらすじ】
脳の思念…つまり精神力が外部に影響を及ぼすと発見された世界。その発見によって禁断の実験の果てに生まれた最凶種が「暗崎霞音」。
現在、暗崎は裏の仕事をしながらまさかの学校に通学！！
最凶種なのに家事と料理が好きなしっかり者の暗崎が織り成すバトルラブストーリー！！

1、所帯じみた最凶種（前書き）

変わった主人公ですが…よろしくお願いします。

「こんな展開を入れてください！！」という意見を送っていただければ参考にします。

注意！！

あまりエロいのはダメです。

残酷描写は、なるべく少なくします（どなたでも楽しめる小説にします）

まあ、ノリは良い方なので気軽に送ってください。

1、所帯じみた最凶種

此処とは違う…もう1つの世界の話。
肉体が及ぼす物理的な力に加え、脳の思念が現実空間に影響があると発見された歴史がある。

そして…悪魔的な研究もこの時に始まりを告げた発見でもあった。
脳の思念が外部に影響を及ぼすならば肉体と精神を分離させて別々に鍛え上げれば神を超える存在が生み出すことが可能である。

ということを確かめる実験だった。

この物語の主人公は、実験の最初で最後の被験者であると思ってさしつかえない。

＊＊＊＊＊＊

某倉庫〜

「クソ！！何だよアイツ！」

「銃弾を躱すなんてどういう反射神経だよ！！」

2人のマフィア関係者は、必死に拳銃で応戦するがその者を目視することができずにいた。

「来ないならこっちから行かせて貰うぜ……」

2人いた男性の目の前ではっきりとした口調で年若い声が聞こえた。

（目の前にアイツがいる！！何で見えないんだ…）

「く、来るなぁぁ！！！」

男は、半狂乱になりながら拳銃をあちらこちら打った。
倉庫内は、銃声と煙で立ち込める。

「ガァ！！……」
タンッ！！という乾いた音ともに男は、意識を手放した。
「さて…残り1人だけだな…」
倉庫の暗闇でその一言だけが不気味にもう1人の男の耳に入る。
男は、何度も眼を擦るが何回やっても結果は同じ。

「何故だ！！何故見えない！！…」
カツンカツンと歩く音が徐々に近づいくる。
次第に男は怯え始め、息遣いが激しくなる。

「人間の脳というのは、巧妙なカラクリで動いている……」
暗闇の中から聞こえてきた。
「理解できないモノは認識できない……すなわち見えなくなるという意味だ……お前にとって俺は、理解できない存在だからな」
男が意識を失うのはそれからコンマ数秒後であった。

＊＊＊＊＊＊

「よし出来たぞ！！」
エプロン姿の青年が台所に向かい熱心に料理を作り上げた。
その青年の名前は「暗崎霞音（あんざきかのん）」。
漆黒をイメージする髪と瞳が特徴的で男性であるが顔立ちは、かわいい系の女性に近い。
その上、家事をしっかりこなすしっかり者でもある。
「グッドモーニングなんだよ～！！カノン！！」
居間の扉を開けて蒼色の長い髪と白衣が印象的な若い女性が元気良

く入ってきて料理を並べている霞音に思い切り抱きついた。

「おお！！今朝のご飯も豪華ですな！！さすが持つべき者は主夫ですな～」

「離してくださいよ…先生…それに何時、俺が貴方の夫になったんですか？」

「硬いこと言わずになっちゃいなって！！私はずぇんずぇん（全然）構わないのだ」

霞音が先生と呼んだ人物は「彼方（かなた）・ラスパンドラ」自他共に認める天才科学者。

霞音の所属している組織の指揮を取っているが自分の興味関心がないものには、何もしないという性格。

そのため家事は、ほぼ霞音に丸投げ。

朝食～（ホカホカご飯と鮭のムニエルと新鮮サラダ）

「デリシャ～スなんだな～！！このサラダのスッキリとしたレモンの風味が絶妙！！」

「食べる時くらい静かにしてくださいよ……朝のニュースが聞こえないじゃないですか…」

いちいち、食べる度にオーバーリアクションで反応する先生に頭を抱える。

「愚かだなカノンちゃんは～！！コミュニケーションは大切なツール！！人類の至宝の宝物なんだよ、使わなきゃ損損！！」

「カノンちゃんって呼ばないでくださいよ……あっ！！報告が遅れましたけど任務が完了してマフィアの「エルビッチ・ファミリー」を壊滅に追い込みましたから…」

エルビッチ・ファミリー…大規模化していたマフィア組織の中心的な存在。
主に金融関係で利益（悪徳金融）を上げていて、このファミリーのおかげで借金地獄に陥った人は数知れない。
最近は更に利益拡大を図って人身売買をやり始めたが霞音が所属する組織に見付かってほぼ壊滅した（組織の総帥は逃亡）。

俺が任務を受け取ること事態珍しいが…エルビッチなら仕方なく赴いた。

霞音は組織の戦闘員の中でもケタ違いの強さと頭脳を持っているため単体での任務は約3年ぶりだった。

普段は、新人の研修なんかに同行する補助員的な役割（霞音がついていくと非常事態が起こった時に、当意即妙で助けてくれるため）そのため組織の新人から尊敬されているが…本人は知らない。

無事報告を終えると霞音は、サラダを口に運ぶ。
（ああ…おいしい…やっぱりサラダはいいなぁ）
基本的に肉や油っこい料理が苦手なため、霞音が作る料理は中高年の方達にとって健康上ありがたいモノしか作らない。

専ら、味付けは「低カロリー」とついているのがほとんど……だから血気盛んな組織のメンバーから「霞音の飯は力が出ない…」と一部苦情が出ている。

油っこいのなんて匂いを嗅ぐだけで気持ち悪くなるからな……よくおいしそうに食べるもんだな。

ちなみに、ムニエルで使ったバターがギリギリ食べれる油食品であ

る。

「あっ！！カノン…報告ついでにこっちも君に伝えたいことがあったんだよ～♪」

「何ですか？」

なるべく油を鮭から振るい落としながら霞音が訊いた。

「ハハ…ゴメンねぇ～！！カノンは今日から学校に通うことを伝え忘れてたよ！！」

ぶっ！！

学校だと！！？…つうか何で今なんだよ！！

「ゲホゲホっ！！どういうことだよ先生！？…俺は別に学校なんかに通わなくても…」

「いや～！私達のボスがね…「世間体のことを考えると暗崎の年齢なら学校に行かない方がおかしいじゃろ！！」って言うもんだからね」

俺の組織は目立つのを極力避けなければならない……学生の年齢で街中にうろついていればかなり目立つことは明白だ。

まあ…いつかは考えなきゃいけない問題だと思っていたけど…義務教育の年齢はひたすら訓練で現在は、１６歳だ。

つまり高校生になるには問題ない年齢。

それにボスからの指令じゃ、行くしかないけど…正直面倒くさい。

昼寝の時間がなくなるし…

「さぁ～て！カノンちゃん！！これから君を奮起させる情報を与えようではないか！」

「いきなり立ち上がらないでくださいよ…何ですか先生？」

「今回、入学する学校の関係者に「君の実験に携わった研究員」が

いるとの推測が私の中で７２％の確率で弾き出されたのだよ～！！」

「なっ！？」

俺を造り出した研究員が……

2、ＩＱ測定（前書き）

勢いで２話目更新しました。
読んでくれる人に感謝します！！

2、ＩＱ測定

「まったく…1週間前には日程を通知したはずだが…」
「すいません…寝坊してしまいまして…」
俺は今、学年指導初等部担当師に大いなる叱責を貰っていた。
それは、この学校始まって以来の（前代未聞の）一度もなかった非常識な「入学式完全欠席」ということをやってしまったのだ。
「今日から天下の帝国(ぐがん)具眼高等学校の一員になることを肝に銘じて、軽率な行動は慎んでもらいたいものだ」
「ぐっ…先生め…」
「何だ私がどうかしたのか！？」
「いえ、貴方ではなく」
勿論、霞音が言ったのは師匠の彼方先生のことである。
帝国具眼高等学校……この国のことが名称の最前線にいるということだから、かなりのエリート校だと予想できる。
てか…詳しく知らん！！
今から2時間前に聴いたばかりじゃ！！
まあ、後で調べてみるとして……何故、こんな事になったのかを説明しなければならないだろう。
現状説明～
ことの顛末は、朝の朝食の時間に遡る（まあ、前回の話に目を通した方なら容易に想像がつくだろう）

しかし、その発言を聴いたのは時間「〇八四四（まるはちよんよん）」で入学式開始時刻は「〇九〇〇」だ。

注意）
この世界の時刻の表し方は０の時に〇を使い、一つ一つの数字を独立的に言う手法をとっている。

〇九〇〇→午前９時ピッタリの時間感覚。
ちなみに午後９時は「二一〇〇（にいちまるまる）」である。

常識的に言って間に合うはずがなかった。
先生の物忘れもあり、学校の制服や荷物の捜索で三〇分（さんまるぶ）使ってしまった。

注意）
私達の世界で常時使われる時間の単位とほぼ同じ。
〇一時（まるいちじ）→１時間
〇一分（まるいちぶ）→１分間
〇一秒（まるいちのぎ）→１秒間
といった感じである。

無事制服と荷物を見つけた時は、入学式は余裕で始まっている時間で思わず「キャー！！」と言ってしまう。
そして学校の地図を渡されたが普通の人がここから歩いて〇二時かかる地点にあり、もうダッシュで向かうが結果的に迷子になり涙の入学式となる。

なんとか見付けてフラフラの身体を引きずりながら大ホールに行っ

たがもぬけの殻でガックリとしていた所に指導部の先生が通りかかり冒頭の叱責に突入する。
「今回は特例で入学を認めるが…今回ので君は我々教師陣に名前と顔を知られることになったわけだ！教育上芳しくないことを起こしたら直ぐに分かってしまうからな……」
「す、すいません…」
ペコペコ頭を下げてなんとか指導部の眼鏡先生の機嫌を損ねないように尽力する。
なぜなら、先生の話しからこの学校の関係者に「俺を造り出した研究員」がいるらしいからだ。

自分の出生の秘密が解ればどのように生きれば良いのかの足掛かりになりそうだからだ。

だからなんとしても潜入（入学）しなければ話が進まない。

「まあ、反省も十分にしているようだから……遅れながら本年度入学者の日程を消化してもらおう…付いてきたまえ…」
すいません遅れながら俺はようやく指導部の先生が女性であることに気が付いた。
筋肉が盛り上がっていて見た目じゃわからなかったぞ…っと言ったら今度こそ退学になりそうなので胃袋まで言葉を押し込む。

検査室〜
さぁて、本日の日程なんて知らない俺は、金魚のフンのように指導部の先生（絶対独身だろう）の後をついていった。

ガチャッ！！と先陣を切る指導部の先生と申し訳なさそうに入る演技をする霞音。
医務室だろうか…脳波を測るような計器がいたる所にあり真っ正面

のロッカーに大きく脳の断面図が印刷された紙が貼られている。
「何だね！…僕の仕事終わりのコーヒーぶれいくを邪魔する輩は…」
笑顔が印象的な男性医師がカップの取っ手とは逆サイドの所を掴みコーヒーを飲んでいた。

「すまない…入学式に遅刻したバカモノの能力の測定をして欲しいのだが…」
（やっぱ根に持ってらっしゃる様子で…）
霞音が顔を伏せて苦笑いを浮かべた。

狐眼の男性は、そのバカモノを興味深気に観察する。
「大抵、こんなこと平気でやる奴は、後にとんでもない事をやるかもしれないし……しないかもしれない…まあ、本人の生き方しだいだな」
狐のように狡猾そうな笑みを出す。

この学校での学年分けとクラス分けは、主に二つの方法が取られている。

一つは、肉体年齢（まあ、年齢）→生年月日から類推。
二つ目は、肉体年齢に対しての精神年齢の度合い（いわゆる、ＩＱの高さ）

測定理論は、肉体年齢が例えば１６歳であり精神年齢が平均的な１８歳の思考パターンならば「ＩＱ１２０」となる。
つまり、現代の肉体年齢と精神年齢が同じ→一般人の基準を「ＩＱ１００」として考え、肉体年齢と比べて精神年齢がどれだけ上に行っているかを考える一つの目安。
「僕はね……道を決められるのがキライなんだよ…先ほど、持って

いたマグカップもね、いかにも取っ手を持てと言わんばかりだったから反対側で持っているんだよ…」

チャッチャと脳波を見る機械と心電図を測定する機械を霞音に付けている途中で医師が呟く。

（スッゲェ！どうでもいいんだけど……）

測定中に身体を動かすことができないので男性医師の話を無条件で聴くという責め苦に耐える。

身体に取り付け終わるとデスクトップを凝視して暗崎の基本情報が書かれたカルテを参考にしてデータを高速で打ち込んでいく。

そうだ…あれを訊いておかないと……

俺は唐突に思い出し男性医師にきいた。

「すいません、今年度の新入生のＩＱの平均はどれくらいなんですかね…？」

「そんなこと訊いてどうするのかな？……自分がいかに落ちこぼれか再確認するのか？」

疑問を疑問で返さないで欲しいな……

大体の平均にＩＱを合わせるつもりだったから非常に困る。

前、測った時はこの状態でＩＱ５００を超えていたから注意しないと機械を破壊してしまう。

「なるべく抑えないと……」そう呟やいてコンピュータに向かう医師を横目で見る。

「な！！ＩＱ６５０だって！今回の一年生の平均は２６０だったのに！！」

あっさり言いやがった。

というか…また上がったな……ってそんな場合じゃない抑える抑える。

「そんなに高くないはずですよ…もう一度よく見てください（にっこり笑みを浮かべながら）」

「むむ…やはり測定ミスだったか……今は２４０で安定しているよいだ…そろそろ機械にガタがきているようだ」

そもそもＩＱは、簡単にコントロールできるモノではないので言及されないのが幸いであった。

俺は訓練のおかげである程度ならコントロールできるが秘密ということで……。

そもそも平均が２５０超えが凄いな……それだけ優秀な生徒が入っているようですね。

3、任務（前書き）

片方だけ余った靴下の使い道を知りたい（相方は、穴が空き捨てました）……

良い案があったら教えてください。

3、任務

ＩＱテスト以外に特におもしろいことが起きずに自分のクラス（標準的なレベル）である「Ｃクラス」に入った後は、担任の先生からの有難い話で終わった。

合流した時はクラス全員に見られたが気にならない。

＊＊＊＊＊＊＊

暗崎の所属する組織の一室～

「……まことに理解し難いことだな」

「本当だよ…いきなり学校に入れなんて唐突過ぎると思うだろ…ミウル」

任務に出陣する前の準備部屋みたいな所で話しをしているのは暗崎と身長が小さめの茶色と黒色が交ざった髪をした女性だった。

「……まあ…年相応に友人でも作ったらどうだ…？…組織の中で対等に会話できるのが私だけでは悲しいだろう……」

ミウルと呼ぶ女性は、がに股で腕をだらしなくぶら下げて左右に振ると暗崎の肩にピョンッ！と飛び乗り肩車のような体勢になる。

ミウル……暗崎が所属する組織のメンバーで実力は、Ｎｏ．１の暗崎に次ぐＮｏ．２　である。

身長は、１４０ｃｍと小柄で体重は３０ｋｇ。

サバサバとした性格で核心を突いた話し方が得意。

なぜか暗崎にだけ懐いておりくっついて寝るのが好き。

姿勢はかなり悪く猫背でがに股、腕は常に脱力しているためキーホ

ルダーのようにぶら下げているだけのように見える。

「下りろよ…」

暗崎が半ば諦めたように呟く。

こうなってしまったら意地でも暗崎から離れないのが彼女であることを知っていたからだ。

久しぶりに霞音に甘えられるのでご機嫌なミウルは、鼻歌混じりで暗崎に訊く。

「年頃の男は異性に抱きつかれると喜ぶといった感情を出すと教わったが霞音はどうだ？」

肩車から身を乗り出して逆さまに映る俺に訊いてきやがった。

吸い込まれそうな紅い眼に俺がいる。

「俺が知るかよ…俺とミウルは同じ時期に実験で生まれたのだからな……性欲なんてモノは理解できんな」

「ふっふふ♪…喜んでいる霞音も見てみたい気がするが残念だな……さて早速、今回の任務の内容でも説明するとしよう…」

肩車のままミウルがポケットからグシャグシャに丸められた辞令書出してからか細い腕で広げる。

シワだらけ辞令書を暗崎の頭に腕を押し当てて大体の内容を伝える。

「……エルビッチ・ファミリーの殲滅だな…霞音が中途半端なＩＱで挑んで総帥を逃がした尻拭いだ……全く」

辞令書

先日逃がした金融業者「エルビッチ・ファミリー」の総帥である「

マージン・エルビッチ」の捕縛及び残党の始末をすること。

担当　　暗崎霞音
　　ミウル

なお万全と前回の失敗から考慮して暗崎霞音は「本気」で臨むことを命じる。

＊＊＊＊

「……だとさ…久しぶりに霞音の本気が見れるなら今回の任務も楽しめそうだな…」嫌味ったらしく暗崎の頭に口を押しつけてシワだらけの辞令書を目の前でチラチラと見せる。

ホレホレ♪

「ぐぅぅ……別にミウルがいるから本気は出さなくて良いと思うのだが……ある意味一番の罰だ…」

「ほれ…諦めてサッサと支度しろ……それと今回の件は貸しだからな…あとで謝礼を…！！…」

肩車の体勢から床に四つん這いで着地したミウルがあからさまに嫌そうな顔で鼻をつまむ。

「霞音…キサマ風呂入ったのか……？」

「んっ……ああ学校から帰ってから軽くシャワーを浴びたが……」

髪をいじりながら暗崎が言う。

「相変わらず無粋な奴だな…私は霞音の匂いが好きなのだがシャンプーの甘ったるい匂いは大嫌いなのを知っているだろうが……」

人よりも嗅覚が優れるミウルはシャンプー使われている柑橘類の匂いが大の苦手。

そのかわり暗崎の匂いはお気に入りで会えば密着してくるのは匂いを嗅ぎにくる目的が大半だった。

本人曰く「最もリラックスできる匂い…」らしい。

俺にはよくわからん…

わざとらしく大きなクシャミをして頭を左右に振る。髪がバタバタと揺れる。

「ペナルティだ霞音…任務が終わったら私の言うことを一つ訊いて貰うぞ…」

未だ鼻を抑えながら余った手で暗崎を指さしながら言った。

「わかったわかった…今回は、俺の任務の失敗が引き起こしたから何でも聞いてやるよ……」

暗崎のいつもの女性みたいなクリクリした眼が死んだ魚のような眼に変わり始めた。

（わがままも健在か……絶対ミウルという名前が合ってない気がする……）

もはや、彼女の名前すらも疑問に感じてしまう。

早く任務を終わらせて寝ないと明日も学校じゃい！！

出陣する前に時計を確認して扉のパスワードを入力する。

認証が完了すると扉のロックが外されて自動的に開いた。

二二〇七　任務開始！

4、エルビッチ・ファミリー（前書き）

主人公は出てきません……ミウルさんの活躍です。

4、エルビッチ・ファミリー

「お願いします！！娘を…詩織を返して下さい！！お金は必ず用意しますからぁ！」

「その言葉聞き飽きたんだよね～！！今までさんざん待ってやったけどよぉ…もう待てないし！！」

とあるビルの入口でボロボロになったサラリーマン姿の男性が必死に土下座をしている。
その男の傍らで眼鏡を深くかけた背広の男と数名の暴力団関係者がサラリーマン姿の男性を取り囲んでいた。
「別に今すぐ5千万A（アグス）を払ってくれりゃぁ…かわいい娘さんを返してやるよ」
「そんな大金……払えないですよ…それに僕が借りたのは15万ですよ」
「うるせーなぁ！！利子だよぉ！！」
「1ヶ月で15万Aが5千万Aになるなんておかしいですよ！！」

「あぁっ！……」
眼鏡をかけた男は、サラリーマンの男性の頭を思い切り掴んで持ち上げる。
そして男性を眼鏡越しに覗き込みながらゆっくりとした口調で言った。

「テメー……俺達を誰だと思ってやがんだぁ！！天下のエルビッチ・ファミリーだぜ！！ただの人間がガタガタ言ってんじゃねーよ！！」
眼鏡をかけた男はサラリーマンの男性の頭を前後に揺さぶり顔面を

正方形のタイルが敷き詰めてある床に押しつけた。
サラリーマンの男性は、口を床につけているので上手く喋ることが出来ずにくぐもった不明な声でうなる。
「まあ、安心しな…お前の娘は今夜中にゴーゴンの市場に連れていかれてオークションにかけられる…中々の上玉だから結構な値段で売れるはずだからよ…」

ゴーゴンの市場…いわゆる闇市。あらゆる盗品を日夜取引している場所。
目玉は、人権を完全に無視した奴隷オークション。

ヒャハハハッ！！と眼鏡の男はポケットに手を突っ込んで高笑いをする。
サラリーマンの男性は、娘のこれからの人生に絶望してむせび泣きをしていた。
「そういうバカなことをするから私らに見つかるんだ……」
不意にロビーに広がる謎の女性の声に暴力団関係者が警戒を始めるが声の出所がわからないらしく上下左右様々な場所を見る。

「キサマらの目の前にいるのだが……そうか認識できないのか…」
そう言った瞬間に眼鏡の男の前に明らかに子供姿の少女が腕を組んでいる状態で出現した。

「どこから現れやがった！！？」
「さっきからいたと言っているだろう……全くのアホー共め！！」
猫背で栄養状態が悪いのかと疑う程の華奢な身体を見たエルビッチ・ファミリーの面々は不敵な笑いを浮かべる。

おそらく油断しているのであろう……こんな小娘に何ができるか！！？と言いたげだ。

「フフ……お嬢さんよぉ…よく知らんがそのまま隠れていれば良かったのにな……でも見られちまったら仕方ないマニアの所にでも売ってやろう」

眼鏡の男はミウルの肩を掴みかかるが突如としてミウルがポケットから果物ナイフを取り出して眼鏡の男の伸ばしてきた掌を切り付けた。

「痛ぅ！！何しやがる！このクソガキ」

ドクドクと静脈特有の淀んだ血液が流れ出ていく中、ミウルは切り付けて血液がついたナイフを血を舐めとる。

その光景に思わず不気味はを感じとり、慌て暴力団関係者は拳銃を次々取り出した。

血を舐めとったミウルは、ゆっくり標的を定めるようにダラリと舌を出して辺りを見渡す。

「機関銃か……随分時代遅れの物を使っているな…」

ミウルは常人が認識することが出来ない状態までＩＱを急激に上げて男達の前から姿を消した。

突然の出来事に驚くが次の瞬間に暴力団関係者の一番端っこにいた男がナイフで切り付けられて蹲（うずくま）る。

次にその隣の男に……それが終わればまた隣の男に…という風にミウルは決して致命的な傷を与えず外傷者を増やしていった。

そしてしまいには、サラリーマンの男以外の全員に外傷を与えると再びＩＱを低くして彼らの視界に映りこんむ。

「これで全員だな……」

果物ナイフに付いた血をペロペロ舐めるミウルが力無くそう言った。

「こんのクソガキめ！！よく分からんトリックを使いやがって！ぶ

っ殺してやる」

ようやく射つべき標的が見えた男達は一斉にミウルに銃口を向け、引き金に力を込めるが銃弾が発射されることはなかった。

どうしたことか…男達は前触れもなく苦しみ出してその場にバタバタと倒れてしまったのです。

ある者は心臓を押さえたまま絶命し……

ある者は頭をかかえながら絶命しました。

その場に残ったのは借金に苦しんでいたサラリーマンの男性と突然、逆立ちを始めた不気味な少女だけしかいなかったのです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0276s/

冥闇の追想

2011年10月9日23時43分発行